

現代女子高校生文化の実態とその背景

千葉 勝吾 (東洋大学大学院・都立市ヶ谷商業高校)

1 問題の所在

若者文化や生徒文化をみると、女子高校生に対しては社会がもつまなざし自体になんらかの偏りがあるように思える。男子生徒の場合は、以前から暴走族やチームといった小集団を対象とした議論もみられたが、今日では17歳の危機に代表される個別的な事件の背景なり問題性を中心とした議論がある一方で、やる気がなくだらしない男子高校生といった一般像というもの強く語られているように思える。これに対して、女子高校生には、一般像としてやる気がなくだらしない女子高校生というイメージは必ずしも確立していないように思える。全体像ではなく女子高校生については、そのサブ・カルチャーグループであるいわゆる「ギャル」「コギャル」についての実態についての社会的関心がもっとも大きいように思われる。

その結果、マスコミなどでとりあげられるような女子高校生をめぐる今日の状況は、当事者である彼女らに対して様々な影響を与えている。彼女らは、マスコミで取り上げられる女子高校生像に対して、否定する一方で影響される面も少なくない。

また、女子高校生を消費者としてのターゲットとする消費社会の影響も大きなものがある。いわゆる「ギャル」雑誌の広告は、ファッションブランド・ショップ、美容整形・ダイエット、化粧品、装飾品、携帯電話、中退者受け入れ高校がほとんどである。また、これらのスポンサーとのタイアップ記事と思われるものも多い。つまり、女子高校生の方が男子に比べ、消費の対象としても主体としても優勢なのである。このことは、女子高校生の主体性確立や成長に対してプラスとマイナスの両方の方向に作用する要素をもつと考えられる。

その一方で、高校教育の現場でも男女協同参画社会の実現という政策目標をもとにした教育内容の見直しや改革がおこなわれ、さらにジェンダーフリー教育に関心の強い教師を中心ににより具体的な実践が重ねられ、広がりを見せている。

脱学校社会を生きる子どもたちは、1日の多

くの生活時間を学校に費やししながら、学校外の現実社会に心を奪われている。特にいわゆる「ギャル」「コギャル」といわれる集団はそのカルチャーの学校規範からの乖離ゆえに、教師と他の生徒(非ギャル)から特別視されている。また、学校外の消費社会と情報社会には、女子生徒のギャル化を促進する作用があると考えられる。

さらに、逆説的な言い方をすれば、気が強く、反権威的な「ギャル」の言動や行動様式は、人権尊重教育やジェンダーフリー教育の効果とみることでもできよう。それゆえ、「非ギャル」は「ギャル」を自分たちと違うと思いながらも無視することはなく、大きな関心をもっており、影響を受けている。

そこで、本研究では女子高校生文化の現状を、今日的視点でとらえ、さらに生徒が学校のなかでどのような「関係性としてのセクシャリティ」¹を育んでいるか、また、学校教育はその形成にどのようにかかわっているのかを考察することを目的とする。

2 調査の概要

本研究は、5人からなる高校3年の女子グループが、1999年11月から2000年3月にかけて、いろいろな高校の同じ高3の女子13名(中退者2名)をインタビューした内容と、彼女等のインタビューをもとにした現代女子高校生についての語りを分析し、その上で、1998年に同世代の都立高校生1,200人におこなった質問紙調査と勤務校を中心とした観察をもとに、考察を加えたものである。

3 結果

インタビューは、学校生活、人間関係を中心に、1人につき40～90分おこなった。

13人のうち、自分のことを11人は「ふつう」、2人は「ギャル」と認識していた。

(1) 現代女子高校生の類型化

自分のクラスをグループ分けしてみてくださいという問に対して、13人中10名が何らかのグループ分けをしている。

¹ 藤田英典「ジェンダーと教育」世織書房、1999

「ふつう」に対抗するグループとして「ギャル」が存在し、約半数の対象者はその二項対立という図式でクラス内のグループを分けていることがわかった。女子高校生がみる「ギャル」とマスコミにより流布されている「ギャル」が同一なものであるかについてはともかく、少なくとも多くの女子高校生には「ギャル」が実体として存在し、多くは「ふつう」の女子高校生とある種の対立的関係があることを示唆していると思われる。

(2) 先生との関係

先生のことをどう思うかという問いに対して、全員が好きか嫌いもしくは何とも思わないと答えていて、基本的に好悪の対象としてみるか、評価に値しないと考えている。

一方、どのような先生がいいのかという点については、頼りになる先生や話しやすい先生をあげアンビバレントな状況をみせている。

(3) 親との関係

インタビューが思っていた以上に、母親とはほとんどの女子高校生がよく話すと答え、その理由は、同性であることと服などの趣味やテレビ番組・タレントなどに共通の話題があることをあげている。

一方、父親とはあまり話さないケースが多く、その理由は帰宅が遅かったり自分の生活時間と合わなくて顔を会わすこと自体が少ないことと、会っても共通の話題がなく、何を話していいのかわからないと答えている。

(4) 友人関係

学校の友人と地元の友人のどちらが仲がいいかという問いには、学校、半々、地元という答えが、約1/3ずつであったが、中退した子はいずれも地元や中学の友人関係が強い。

また、学校の方が多いという子はいずれも部活動をやっており、部活動が学校での友人形成に影響しているのが確認された。

(5) バイト

バイトをしているのは5名で、していない者のうち2名もアルバイト経験があった。

アルバイトをする主な理由は、お金でありとくに特定の買いたいものがなくても、とりあえず稼げば、雑誌やお店・バーゲンとかで買うものはいっぱいあるし、ケータイ代も大変で、学校でペットボトルの飲み物が買えないといった貧しい思いをしなくてよいからだと答えている。

また、バイトは学校と違って、自分がいないと迷惑かけるから、しっかりやらなければならないといった、消費社会に主体的にも取り込まれ浮遊する状況があきらかとなった。

(6) メディア

暇な時はテレビを見ることは共通していたが、「ギャル」やバイトに多忙な子は夜間、家に居ないので、いわゆる人気ドラマなどを定期的に視聴することではなく、私的な友人関係が中心となっている。

さらに、全員がケータイ又はPHSを所有しているが、使う派・使わない派、メール派・会話派に分化している。

4 考察—「ギャル」を中心に—

・「ふつう」と「ギャル」を定義する

勤務校の修学旅行で沖縄に行った際に、「地元の中学生から一緒に写真撮って」といわれたの〜と自慢げに言ってきた生徒は、ギャングロ、金髪の「ギャル」であった。大都市に優勢なこの生徒文化はどのような実態と背景を有しているのだろうか。

「ふつう」の女子高校生に対して「ギャル」をどう定義するのか？インタビューアの彼女たちも議論を重ねた。その結論は、「濃くて、きつい」であった。濃いとは化粧が濃く、服装が露出的で色使いが派手、性格や言動がきついというイメージで定義された。ここにはマスコミのみる、「ギャル」=遊んでる子=悪い子の見方はない。「ふつう」の子も遊んでたり、悪かったりしてるし、「ギャル」にもいい子やそれなりにしっかりしてる子もいるとみている。

結論を言えば、「まわりより派手で目立つ子がギャル」という相対的な分類をしているように思える。よって、進学校においても「ギャル」といわれる子はいるが、その子は非進学校ではそのようには見られない。男子における暴走族のような固定的な存在でなく、学校などの中間集団において相対的に区別されるいわば、まなざしである。マスコミにとりあげられるのはそのなかのごく一部にすぎない。

・場と関係性

援助交際といった関係性は、基本的に否定されて、彼氏には自分だけに優しくしてほしいという関係性を求めているが、異性との友人関係については個別性が高い。

一方において、「ギャル」は逸脱的行動に対する許容性が高いが、ボランティア活動など役割期待を求められる場では、「ふつう」への「乗り換え」がおこることが観察され、与えられた場において他者との関係性が構築されるメカニズムが存在することが確認された。

(分析の詳細については、当日に資料配布いたします)